様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ０３５９６

研究課題名（和文）ホモ・サピエンス躍進の初源史：東アジアにおける海洋進出のはじまりを探る総合的研究

研究課題名（英文）Early history of the leap of Homo sapiens: A comprehensive study on the beginning of maritime migration in East Asia

研究代表者
海部　陽介（Kaifu, Yousuke）

東京大学・総合研究博物館・教授

研究者番号：２０２８０５２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　34,100,000円

研究成果の概要（和文）：日本列島周辺海域は、初期ホモ・サピエンスによる、世界最古級の挑戦的な海洋進出がくり広げられた舞台であるが、その詳細は不明であった。本研究では４つの海域（朝鮮・対馬海峡、琉球列島、伊豆諸島、津軽海峡）に注目し、遺跡に残されている海洋進出の証拠を洗い出しながら、後期旧石器時代（場所によっては縄文時代まで）における渡海の実態をはじめて整理した。その結果、後期旧石器時代の渡海行動は縄文時代ほど頻繁ではないが、これまで考えられていた以上に活発な海洋活動があった実態が浮かび上がってきた。海洋学的データなどの分析からこれらが漂流の結果であった可能性は低く、当時既に丸木舟が存在していた可能性も示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
後期旧石器時代に始まったホモ・サピエンスの海洋進出は、人類が生息域を全球規模に広げるに至った原動力の１つであった。しかし、これまでインドネシア東部海域で最古の事例が知られていることを除けば、世界各地の実態、当時の渡海行動の活発さや難易度、使われた舟、発展史など、その内容についてはほとんどわかっていなかった。本研究には、日本列島周辺海域においてその証拠をはじめて網羅的に整理し、成果を多数の英語論文で公表した学術的意義がある。さらに、海を舞台にした技術開発と挑戦の歴史が数万年前にさかのぼるという新たな歴史観を示した点は、人の成り立ちについて見直す側面を持ち、大きな社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The seas surrounding the Japanese archipelago were the areas where one of the world's oldest, challenging maritime expeditions were performed by early Homo sapiens, but their details have remained unknown. In this study, we examined new and old evidence of maritime transportation left at archaeological sites around four sea areas (the Korea/Tsushima Straits, Ryukyu Islands, Izu Islands, and Tsugaru Straits), and documented the conditions of seagoing during the Upper Palaeolithic (through to the Jomon Period in some places) for the first time. We demonstrated that the Upper Palaeolithic seagoing in these areas had been more active than previously thought, although it was less frequent compared to the succeeding Jomon Period. Analysis of oceanographic data and other evidence strongly suggest that these Upper Palaeolithic maritime movements were not resulted from accidental drifting, and that a dugout may have already existed at that time.

研究分野：人類学・考古学

キーワード：ホモ・サピエンス　東アジア　旧石器時代　縄文時代　海洋進出

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

後期旧石器時代に始まったホモ・サピエンスの海洋進出は、人類が生息域を全球規模に広げるに至った最大の原動力の１つであった。しかしその背景にあったチャレンジや技術革新については、国際的に研究が乏しく、不明な点が多い。そもそも 38000～5000 年前の東アジア海域（日本列島周辺）が、当時の世界で最先端の海への挑戦の舞台であったことは、代表者らが 2015 年に指摘するまであまり認識されていなかった（文献 1)。そこで、遺跡・環境データが充実している日本の利点を活かして、日本周辺海域を舞台にした、先史人類の海への挑戦史を総合的に描き出すことを着想した。得られる成果は、人類の海洋進出史についての理解を大きく前進させるだけでなく、現代の社会が、何万年も前から続く遠い祖先たちの挑戦の上に成り立っているという、新たな歴史認識の醸成に貢献するはずである。

２．研究の目的

考古学・自然人類学・数理生物学・海洋学などの多彩な手法を駆使して、東アジア海域（日本列島周辺）における、旧石器～縄文時代の海への挑戦史を総合的に描き出すことを目的とする。この地域で生まれた海洋文化は、渡海が困難な琉球列島全域への拡散や、世界最古の往復航海の証拠を伴うなど、当時の世界では最先端といえるものであった。遺跡に残されている海洋進出の証拠を洗い出し、その実態を明らかにし、このような文化がどのように発達していったのかを探る。

３．研究の方法

以下の４つの観点から研究を実施した。

(1) 海域別海洋進出史：朝鮮・対馬海峡、琉球列島、伊豆諸島、津軽海峡に注目し、この海域別に海峡横断とその規模を示す証拠を積み上げ、後期旧石器時代から縄文時代を視野に入れた海洋進出史を描く。

(2) 漂流 vs.意図的航海：当海域における後期旧石器時代の渡海の証拠を吟味し、漂流説が支持されるかどうかを検討する。特に琉球列島については、当時の移住が偶然の漂流によるという仮説を渡来人口のシミュレーションや海洋学的データを用いて検証する。

(3) 渡海の難易度：当時の地理・海流状況の復元研究を参照し、別プロジェクトとして進めている実験航海の成果とあわせながら、当時の渡海の難易度を検討する。

(4) 海洋進出に使われた舟：遺物として未発見である後期旧石器時代の舟を合理的に推定するため、候補となる舟に対して旧石器による製作が可能であるかどうかを検証し、当時の旧石器にそうした素材の加工痕跡が認められるかを調べる。また、当時は風力で駆動する帆船技術はなかったというモデルの傍証として、遺跡出土人骨に常習的舟漕ぎの痕跡が認められるかどうかについても調査する。

４．研究成果

(1) 海域別海洋進出史：以下に述べるように、各海峡の横断史が鮮明となっただけでなく、当時の人々の暮らしぶりや技術・文化・社会についても新たな知見がもたらされた。

　対馬海峡については、主に朝鮮・対馬海峡をこえて起こった人類移住・交渉史について、以下の成果を得た。(a)朝鮮半島南部と九州を中心とした日本列島の地域編年をレビューするとともに、最終氷期最寒冷期におこった海峡間交渉を具体的に示す剥片尖頭器の出現・存続年代に関する放射性炭素年代測定を実施した。これらにより、海峡を挟んだ文化現象のうち、特に後期旧石器時代中葉について時間的対応関係を高精度化することができた。(b)海峡をこえた交渉を考古資料から具体的に示すため、黒曜石の移動に関する研究をレビューした。また、現生人類による朝鮮・対馬海峡の最初の横断証拠と考えられる石の本遺跡群 8 区石器群に含まれる黒曜石の産地推定研究を実施し、遺跡形成集団がすでに九州の主要な黒曜石原産地を開発していたことを初めて明らかにした。(c)編年と黒曜石研究を両輪とした上記の成果を、World Archaeology 特集号にて総合し、現生人類による朝鮮・対馬海峡の横断時期、交渉様式（横断の方向性）の観点から通時的に整理した（文献 2～6)。

　琉球列島については、徳之島の天城遺跡の発掘調査と資料調査を行い、日本列島最南端の後期旧石器時代前半期石器群の概要を把握した。沖縄島のサキタリ洞遺跡に関しては発掘調査と遺物の分析を行い、旧石器時代の貝製釣針の機能に関する実験、顔料関係遺物について報告した。また、島嶼環境における動物とヒトの関係を探求する目的で宮古島ツヅピスキアブの完新世初頭イノシシ、沖縄島の更新世シカ類の研究を進め、動物資源利用について発表を行った（文献 7～16)。

　伊豆諸島については、関東・中部・東海東部（愛鷹・箱根）に分布する旧石器時代の神津島産黒曜石について、既存の原産地推定結果を収集し、未報告・新出のものについては新た

に蛍光X線分析による原産地推定を実施した。その結果、愛鷹・箱根山麓には 37,500 年前～34,200 年前（X･IX層段階）という長期にわたって神津島産黒曜石が持ち込まれていることが明らかとなつた。また関東地方における神津島産黒曜石の出現年代は必ずしも明確ではないものの、36,000 年前頃には登場し、34,000 年前よりも新しい時代（VII層段階）まで継続することが明らかとなった（文献 17～24）。

津軽海峡については、列島人類史初頭の旧石器時代から縄文時代にかけての先史時代における北海道と本州の間の海洋進出の歴史的動態について、総合的に検討した。海峡を挟んだ相互の交流は旧石器時代にも認められるが、恒常的とは呼びがたく、それが安定した交流となるのは縄文時代早期以降となることが判明した（文献 25～31）。

(2) 漂流 vs.意図的航海：海洋学で利用されている漂流ブイのデータ解析を行い、琉球列島への渡海が漂流で説明される可能性は極めて低いことをはじめて実証した。島にたどりついた集団が人口維持するための初期人口の条件についてのシミュレーションも行った（文献 32～33）。

(3) 渡海の難易度：神津島への渡海を理解するための貴重な参考事例として、現代のシーカヤッカーが行った伊豆半島から神津島への航海事例を記録し報告した。琉球列島については、海域全体の渡海難易度を距離や視認性および海流の観点から評価し、実験航海の成果論文をまとめた（文献 34～43）。

(4) 海洋進出に使われた舟：別に進行している実験航海プロジェクトから、後期旧石器時代の琉球列島への渡海に利用されたのは丸木舟の可能性が高いという見解が示されたことを受け、当時の石斧レプリカを用いた丸木舟製作を実施したところ、製作可能であることが確かめられた（文献 42）。石斧の研究としては以下を行った：(a)刃部磨製石斧の実験複製品 80 点を作成し、75 点を体系的実験（伐採、木製品製作、皮なめし、骨・角の加工、運搬、踏みつけ、製作途中の破損、刃部再生など）に使用することで、遺跡資料を観察する際に参照する実験使用痕のデータベースを作成した。(b)遺跡出土の刃部磨製石斧のデータベースを完成させ、合計 1354 点の刃部磨製石斧および関連資料を集成した。(c) 遺跡出土の刃部磨製石斧について、合計で 41 遺跡 286 点の観察を実施し、各種の使用痕を確認した。(d) 遺跡出土の刃部磨製石斧 289 点について３次元スキャンデータを取得した（文献 44～45）。縄文時代人の上腕骨の形態学的調査を行ったところ、縄文時代の航法が漕ぎ主体であるとの仮説を支持する結果が得られた（文献 46～47）。

(5) 個々の発表以外に、研究の成果全体の和文ダイジェストを季刊考古学の特集号「海洋進出の初源史」（海部陽介・佐藤宏之編）に参加者全員プラスアルファで公表した（文献 4・7・10・17・18・26・27・37・38・44・47）。そのほか、2022 年の第９回国際考古学会議（チェコ）で関連セッション「Global Evidence of the Late Pleistocene Seafaring and Maritime Adaptation: When, Where, and How」（共同オーガナイザー：海部陽介）を組んで２名（海部、藤田）が発表し、国際専門誌 World Archaeology で組んだ特集号「Islands and Hominin Adaptation」（共同編集者：海部陽介）に２編の論文（海部、森先/芝）を出版した（文献 3・35）。

＜引用文献＞

1. Kaifu, Y., Izuho, M., Goebel, T., 2015. Modern human dispersal and behavior in Paleolithic Asia: Summary and discussion, in: Kaifu, Y., Izuho, M., Goebel, T., Sato, H., Ono, A. (Eds.), Emergence and Diversity of Modern Human Behavior in Paleolithic Asia. Texas A&M University Press, College Station, pp. 535-566.
2. 森先一貴 2023. 日本列島における人類の初期移住：議論と課題. 文化交流研究 36:37-46.
3. Kazuki Morisaki, Kojiro Shiba, Donghyuk Choi, 2022. Examining frequency and directionality of Palaeolithic sea-crossing over the Korea/Tsushima Strait: a synthesis. World Archaeology 54:162-186.
4. 森先一貴，芝康次郎 2022.海洋進出の始まり：西の海「朝鮮・対馬海峡」. 季刊考古学 161:17-20.
5. 森先一貴，芝康次郎，角縁進，隅田祥光 2022. 石の本遺跡群にみる行動的現代性－波長分散型蛍光 X 線分析による黒曜石産地推定研究. 旧石器研究 18: 71-85.
6. 芝康次郎 2020. 朝鮮半島旧石器時代の黒曜石利用についての新動向. 九州旧石器. 24:275-284.
7. 藤田祐樹，山崎真治 2022. 海洋進出のはじまり 南の海：琉球列島. 季刊考古学 161:21-24.
8. Masaki FUJITA, Shinji YAMASAKI, Ryohei SAWAURA. 2020. Chapter 7: Migration,

culture, and lifestyle of the Paleolithic Ryukyu Islanders. In Rintaro ONO, Alfred PAWLIK (eds) Pleistocene Archaeology - Migration, Technology, and Adaptation. IntechOpen Ltd., London, pp.133-147.
9. Mugino O. Kubo, Masaki Fujita. (2020) Diets of Pleistocene insular dwarf deer revealed by dental microwear texture analysis. Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology 562:110098.
10. 山崎真治 2022. 縄文時代の琉球列島における海洋進出と遠洋航海. 季刊考古学 161:57-59.
11. 山崎真治，澤浦亮平，黒住耐二，藤田祐樹，竹原弘展，海部陽介. 2021.サキタリ洞遺跡の貝製ビーズと顔料利用に関する新たな知見－沖縄の旧石器文化をめぐる特殊性と普遍性－. 旧石器研究 17:57-77.
12. 山崎真治 2020.南島先史土器の起源.九州縄文早期研究ノート. 6:313-325.
13. 山崎真治・宮城弘樹. 2018.特輯：琉球弧における先史時代研究の新展開に寄せて.古代文化. 69:522-525.
14. 山崎真治 2018.琉球弧における旧石器時代遺跡の諸相と特質.古代文化 69:526-534.
15. 山崎真治 2018.沖縄における土器胎土分析をめぐる諸問題.南島考古 37:1-16.
16. 山崎真治 2018.現代沖縄における野営炉址の調査―炉址研究の参照枠充実に向けた基礎作業.考古学研究 65:114-124.
17. 池谷信之 2022. 海洋進出のはじまり 東の海 ―伊豆諸島. 季刊考古学 161:25-28.
18. 池谷信之 2022. 遺跡様態からみた縄文海洋進出史(伊豆諸島). 季刊考古学 161:53-56.
19. 池谷信之 2021.大塚台遺跡出土の黒曜石原産地推定結果報告.首都圏中央連絡道埋蔵文化財調査報告書 38 多古町大塚台遺跡(1)～(3) .千葉県教育振興財団調査報告 784:62-65.
20. 池谷信之 2021.下ヶ戸貝塚出土黒曜石製石器の原産地推定.下ヶ戸貝塚Ⅷ.下ヶ戸貝塚第５次・６次・７次・９次・11 次発掘調査報告書.我孫子市埋蔵文化財報告 64:335-340.
21. 平井義敏・池谷信之 2021.東海地方西部における神津島産黒曜石製両面体石器群.東海石器研究 齊藤基生先生追悼号. 11:109-119.
22. 池谷信之・保坂康夫・相川壌 2019.甲府市立石遺跡出土台形様石器の黒曜石産地分析.山梨考古学論集Ⅷ. pp.13-16.
23. 池谷信之・大竹憲明 2019. 弓張日向遺跡出土黒曜石製石器の産地をめぐって.長野県考古学会誌 157:62-70.
24. 池谷信之・中川真人 2018. 橋本遺跡出土石器群の再検討と黒曜石原産地.相模原市立博物館研究報告 26: 1 -15.
25. Sato,H. and Morisaki, K. 2022. On the beginning of the Japanese Paleolithic: A review of recent archaeological and anthropological evidence. Acta Anthropologica Sinica, 41e.
26. 佐藤宏之 2022 北の海-津軽海峡. 季刊考古学 161:29-32.
27. 佐藤宏之・根岸洋 2022.遺跡様態からみた縄文の海洋進出史. 季刊考古学 161:45-48
28. 根岸洋・池谷信之・佐藤宏之 2020.上北・八戸地域から出土した縄文早期の黒曜石製石器群の産地推定と考察.東京大学考古学研究室紀要. 33:23-35.
29. 佐藤宏之・根岸洋 2021.陸奥湾および男鹿半島における木造船を用いた漁撈活動に関する民族考古学的研究.東京大学考古学研究室研究紀要. 34:73-84.
30. 根岸洋・大上立朗・太田圭・岡本洋 2021「宇鉄遺跡出土の碧玉製管玉に関する基礎的研究」『青森県立郷土館研究紀要』45:63-74.
31. 根岸洋・夏木大吾・國木田大・池谷信之・佐藤宏之 2022.津軽海峡周辺域における縄文時代早期の測定年代と黒曜石産地推定.東京大学考古学研究室研究紀要. 34:1-2.
32. Kaifu, Y., Kuo, T.-H., Kubota, Y., Jan, S. 2020. Palaeolithic voyage for invisible islands beyond the horizon. Sci. Rep. 10, 19785.
33. Ihara, Y., Ikeya, K., Nobayashi, A., Kaifu, Y. 2020. A demographic test of accidental versus intentional island colonization by Pleistocene humans. Journal of Human Evolution 145:102839.
34. 池谷信之・塩島敏明 2018.縄文時代における神津島への航海と黒潮－シーカヤックによる渡航事例をもとに.貝塚 74:21-26
35. Kaifu, Y., 2022. A synthetic model of Palaeolithic seafaring in the Ryukyu Islands, southwestern Japan. World Archaeology 54:187-206.
36. 海部陽介 2023. 航海者だった日本列島の後期旧石器時代人. 考古学ジャーナル 777:19-23.
37. 海部陽介 2022. 実験航海プロジェクトを通じて理解したこと. 季刊考古学 161:33-36.
38. 海部陽介・佐藤宏之・山田昌久・池谷信之 2022. 座談会 人はなぜ海に出たのか. 季刊考古学 161: 86-99.
39. 海部陽介 2022. ３万年前の航海 徹底再現プロジェクト ―海洋進出のはじまりを

さぐる－．海事交通研究 71: 97-106.
40. Kaifu, Y., Ishikawa, J., Muramatsu, M., Kokubugata, G., Goto, A. 2021. Establishing the efficacy of reed-bundle rafts in the Paleolithic colonization of the Ryukyu Islands. The Journal of Island & Coastal Archaeology 17:571-584.
41. 海部陽介, 2020. アジア人類史の舞台として沖縄に注目すべき五つの理由. 学術の動向 25:2-6.
42. Kaifu, Y., Lin, C.-H., Goto, A., Ikeya, N., Yamada, Y., Chiang, W.-C., Fujita, F., Hara, K., Hawira, T., Huang, K.-E., Huang, C.-H., Kubota, Y., Liu, C.-H., Miura, K., Miyazawa, Y., Monden, O., Muramatsu, M., Sung, Y., Suzuki, K., Tanaka, N., Tsang, C.-H., Uchida, S., Wen, P.-L. 2019. Palaeolithic seafaring in East Asia: An experimental test of the bamboo raft hypothesis. Antiquity 93:1424-1441.
43. 海部陽介 2018. 黒潮と対峙した 3 万年前の人類　―航海プロジェクトから. 科学 88:604-610.
44. 岩瀬彬・佐野勝宏・長崎潤一・山田昌久・海部陽介 2022. 後期旧石器時代前半期の刃部磨製石斧からさぐる舟の可能性. 季刊考古学 161: 37-40.
45. 長崎潤一 2022. 後期旧石器時代前半期の大規模遺跡と石斧. 月間考古学ジャーナル 764:6-10.
46. 海部陽介・増山禎之 2018. 縄文時代人の上腕骨はなぜ太いのか？ 遺跡間変異が示唆するその原因. Anthropological Science (Japanese Series) 126:133-155.
47. 海部陽介 2022. 縄文人骨が語る海洋進出の様相. 季刊考古学 161: 74-76.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計55件（うち査読付論文　19件／うち国際共著　6件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 Kaifu, Y., Lin, C.-H., Goto, A., Ikeya, N., Yamada, Y., Chiang, W.-C., Fujita, F., Hara, K., Hawira, T., Huang, K.-E., Huang, C.-H., Kubota, Y., Liu, C.-H., Miura, K., Miyazawa, Y., Monden, O., Muramatsu, M., Sung, Y., Suzuki, K., Tanaka, N., Tsang, C.-H., Uchida, S., Wen, P.-L.	４．巻 93
２．論文標題 Palaeolithic seafaring in East Asia: An experimental test of the bamboo raft hypothesis	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Antiquity	６．最初と最後の頁 1424-1441
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15184/aqy.2019.90	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 根岸洋・池谷信之・佐藤宏之	４．巻 33
２．論文標題 上北・八戸地域から出土した縄文早期の黒曜石製石器群の原産地分析と考察	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東京大学考古学研究室研究紀要	６．最初と最後の頁 23-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079710	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 海部陽介	４．巻 2
２．論文標題 アジア人類史の舞台として沖縄に注目すべき五つの理由	５．発行年 2020年
３．雑誌名 学術の動向	６．最初と最後の頁 2-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5363/tits.25.2_58	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 海部陽介・増山禎之	４．巻 126
２．論文標題 縄文時代人の上腕骨はなぜ太いのか？―遺跡間変異が示唆するその原因―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Anthropological Science (Japanese Series)	６．最初と最後の頁 133-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1537/asj.180805	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 池谷信之・前嶋秀張	4．巻 2018
2．論文標題 愛鷹山麓の石材環境と石材選択の変遷	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本考古学協会2018年静岡大会研究発表資料集	6．最初と最後の頁 61-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 池谷信之・塩島敏明	4．巻 74
2．論文標題 縄文時代における神津島への航海と黒潮－シーカヤックによる渡航事例をもとに－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 貝塚（物質文化研究会）	6．最初と最後の頁 21-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 池谷信之・中川真人	4．巻 26
2．論文標題 橋本遺跡出土石器群の再検討と黒曜石原産地	5．発行年 2018年
3．雑誌名 相模原市立博物館研究報告	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 芝康次郎	4．巻 22
2．論文標題 西北九州黒曜石原産地研究をめぐる諸問題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 九州旧石器	6．最初と最後の頁 115-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 芝康次郎	4．巻 7
2．論文標題 技術組織からみた河原細石刃石器群の形成	5．発行年 2019年
3．雑誌名 先史学・考古学論究	6．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩瀬　彬	4．巻 14
2．論文標題 古本州島東半分における後期旧石器時代の石器使用の変異性とその含意	5．発行年 2018年
3．雑誌名 旧石器研究	6．最初と最後の頁 51-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎真治	4．巻 22
2．論文標題 沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の発掘調査	5．発行年 2018年
3．雑誌名 九州旧石器	6．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎真治	4．巻 37
2．論文標題 沖縄における土器胎土分析をめぐる諸問題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 南島考古	6．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takamiya Hiroto、Katagiri Chiaki、Yamasaki Shinji、Fujita Masaki	4．巻 14
2．論文標題 Human Colonization of the Central Ryukyus (Amami and Okinawa Archipelagos), Japan	5．発行年 2019年
3．雑誌名 The Journal of Island and Coastal Archaeology	6．最初と最後の頁 375～393
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/15564894.2018.1501443	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 海部陽介	4．巻 88
2．論文標題 黒潮と対峙した3 万年前の人類　―航海プロジェクトから	5．発行年 2018年
3．雑誌名 科学	6．最初と最後の頁 604-610
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山崎真治・宮城弘樹	4．巻 69
2．論文標題 特輯：琉球弧における先史時代研究の新展開に寄せて	5．発行年 2018年
3．雑誌名 古代文化	6．最初と最後の頁 522-525
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎真治	4．巻 69
2．論文標題 琉球弧における旧石器時代遺跡の諸相と特質	5．発行年 2018年
3．雑誌名 古代文化	6．最初と最後の頁 526-534
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎真治	4．巻 65
2．論文標題 現代沖縄における野営炉址の調査―炉址研究の参照枠充実に向けた基礎作業	5．発行年 2018年
3．雑誌名 考古学研究	6．最初と最後の頁 114-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 池谷信之・保坂康夫・相川壌	4．巻 8
2．論文標題 甲府市立石遺跡出土台形様石器の黒曜石産地分析	5．発行年 2019年
3．雑誌名 山梨考古学論集	6．最初と最後の頁 13-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 池谷信之・大竹憲明	4．巻 157
2．論文標題 弓張日向遺跡出土黒曜石製石器の産地をめぐって	5．発行年 2019年
3．雑誌名 長野県考古学会誌	6．最初と最後の頁 62-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kaifu Yousuke、Kuo Tien-Hsia、Kubota Yoshimi、Jan Sen	4．巻 10
2．論文標題 Palaeolithic voyage for invisible islands beyond the horizon	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Scientific Reports	6．最初と最後の頁 19785
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1038/s41598-020-76831-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Ihara Yasuo、Ikeya Kazunobu、Nobayashi Atsushi、Kaifu Yosuke	4．巻 145
2．論文標題 A demographic test of accidental versus intentional island colonization by Pleistocene humans	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of Human Evolution	6．最初と最後の頁 102839～102839
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jhevol.2020.102839	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎真治	4．巻 6
2．論文標題 南島先史土器の起源	5．発行年 2020年
3．雑誌名 九州縄文早期研究ノート	6．最初と最後の頁 313-325
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Fujita Masaki、Yamasaki Shinji、Sawaura Ryohei	4．巻 -
2．論文標題 The Migration, Culture, and Lifestyle of the Paleolithic Ryukyu Islanders	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Pleistocene Archaeology - Migration, Technology, and Adaptation	6．最初と最後の頁 133-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5772/intechopen.92391	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kubo Mugino Ozaki、Fujita Masaki	4．巻 562
2．論文標題 Diets of Pleistocene insular dwarf deer revealed by dental microwear texture analysis	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology	6．最初と最後の頁 110098～110098
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.palaeo.2020.110098	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 芝康次郎	4．巻 24
2．論文標題 朝鮮半島旧石器時代の黒曜石利用についての新動向	5．発行年 2020年
3．雑誌名 九州旧石器	6．最初と最後の頁 275-284
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kaifu Yousuke、Ishikawa Jin、Muramatsu Minoru、Kokubugata Goro、Goto Akira	4．巻 17
2．論文標題 Establishing the efficacy of reed-bundle rafts in the paleolithic colonization of the Ryukyu Islands	5．発行年 2021年
3．雑誌名 The Journal of Island and Coastal Archaeology	6．最初と最後の頁 571～584
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/15564894.2021.1872120	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 佐藤 宏之、根岸 洋	4．巻 34
2．論文標題 陸奥湾および男鹿半島における木造船を用いた漁撈活動に関する民族考古学的研究	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東京大学考古学研究室研究紀要	6．最初と最後の頁 73～84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002000319	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 根岸洋・大上立朗・太田圭・岡本洋	4．巻 45
2．論文標題 宇鉄遺跡出土の碧玉製管玉に関する基礎的研究	5．発行年 2021年
3．雑誌名 青森県立郷土館研究紀要	6．最初と最後の頁 63-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 池谷信之	4．巻 78
2．論文標題 大塚台遺跡出土の黒曜石原産地推定結果報告	5．発行年 2021年
3．雑誌名 千葉県教育振興財団調査報告	6．最初と最後の頁 62-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 池谷信之	4．巻 64
2．論文標題 下ヶ戸貝塚出土黒曜石製石器の原産地推定	5．発行年 2021年
3．雑誌名 我孫子市埋蔵文化財報告	6．最初と最後の頁 335-340
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 平井義敏・池谷信之	4．巻 11
2．論文標題 東海地方西部における神津島産黒曜石製両面体石器群	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東海石器研究	6．最初と最後の頁 109-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎真治，澤浦亮平，黒住耐二，藤田祐樹，竹原弘展，海部陽介	4．巻 17
2．論文標題 サキタリ洞遺跡の貝製ビーズと顔料利用に関する新たな知見－沖縄の旧石器文化をめぐる特殊性と普遍性－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 旧石器研究	6．最初と最後の頁 57-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kaifu Yousuke	4．巻 54
2．論文標題 A synthetic model of Palaeolithic seafaring in the Ryukyu Islands, southwestern Japan	5．発行年 2022年
3．雑誌名 World Archaeology	6．最初と最後の頁 187～206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00438243.2022.2121317	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Morisaki Kazuki、Shiba Kojiro、Choi Donghyuk	4．巻 54
2．論文標題 Examining frequency and directionality of Palaeolithic sea-crossing over the Korea/Tsushima Strait: a synthesis	5．発行年 2022年
3．雑誌名 World Archaeology	6．最初と最後の頁 162～186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00438243.2023.2172071	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 海部陽介・佐藤宏之	4．巻 161
2．論文標題 人類の海洋進出	5．発行年 2022年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 14-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森先一貴，芝康次郎	4．巻 161
2．論文標題 海洋進出の始まり：西の海「朝鮮・対馬海峡」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 17-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤田祐樹，山崎真治	4．巻 161
2．論文標題 海洋進出のはじまり：南の海「琉球列島」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 池谷信之	4．巻 161
2．論文標題 海洋進出のはじまり：東の海　「伊豆諸島」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 25-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤宏之	4．巻 161
2．論文標題 海洋進出のはじまり：北の海　「津軽海峡」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 29-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 海部陽介	4．巻 161
2．論文標題 実験航海プロジェクトを通じて理解したこと	5．発行年 2022年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 33-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩瀬彬・佐野勝宏・長崎潤一・山田昌久・海部陽介	4．巻 161
2．論文標題 後期旧石器時代前半期の刃部磨製石斧からさぐる舟の可能性	5．発行年 2022年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 37-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤宏之・根岸洋	4．巻 161
2．論文標題 遺跡様態からみた縄文の海洋進出史（津軽・北海道）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 45-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 池谷信之	4．巻 161
2．論文標題 遺跡様態からみた縄文の海洋進出史（伊豆諸島）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 53-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎真治	4．巻 161
2．論文標題 縄文時代の琉球列島における海洋進出と遠洋航海	5．発行年 2022年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 57-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 海部陽介	４．巻 161
２．論文標題 縄文人骨が語る海洋進出の様相	５．発行年 2022年
３．雑誌名 季刊考古学	６．最初と最後の頁 74-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 海部陽介・佐藤宏之・山田昌久・池谷信之	４．巻 161
２．論文標題 座談会：人はなぜ海に出たのか	５．発行年 2022年
３．雑誌名 季刊考古学	６．最初と最後の頁 86-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 海部陽介	４．巻 71
２．論文標題 ３万年前の航海 徹底再現プロジェクト　－海洋進出のはじまりをさぐる－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 海事交通研究	６．最初と最後の頁 97-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Sato,H. and Morisaki, K.	４．巻 41e
２．論文標題 On the beginning of the Japanese Paleolithic: A review of recent archaeological and anthropological evidence	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Acta Anthropologica Sinica	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 根岸 洋、夏木 大吾、國木田 大、池谷 信之、佐藤 宏之	4．巻 35
2．論文標題 津軽海峡周辺域における縄文時代早期の測定年代と黒曜石産地推定	5．発行年 2022年
3．雑誌名 東京大学考古学研究室研究紀要	6．最初と最後の頁 1～24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002003770	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Mennecart Bastien、Dziomber Laura、Aiglstorfer Manuela、Bibi Faysal、DeMiguel Daniel、Fujita Masaki、Kubo Mugino O.、Laurens Flavie、Meng Jin、M?tais Gr?goire、M?ller Bert、R?os Mar?a、R?ssner Gertrud E.、S?nchez Israel M.、Schulz Georg、Wang Shiqi、Costeur Lo?c	4．巻 13
2．論文標題 Ruminant inner ear shape records 35 million years of neutral evolution	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Nature Communications	6．最初と最後の頁 7222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1038/s41467-022-34656-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 森先一貴，芝康次郎，角縁進，隅田祥光	4．巻 18
2．論文標題 石の本遺跡群にみる行動的現代性ー波長分散型蛍光X線分析による黒曜石産地推定研究	5．発行年 2022年
3．雑誌名 旧石器研究	6．最初と最後の頁 71-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 長崎潤一	4．巻 764
2．論文標題 後期旧石器時代前半期の大規模遺跡と石斧	5．発行年 2022年
3．雑誌名 考古学ジャーナル	6．最初と最後の頁 6-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 海部陽介	4．巻 777
2．論文標題 航海者だった日本列島の後期旧石器時代人	5．発行年 2023年
3．雑誌名 考古学ジャーナル	6．最初と最後の頁 19-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森先一貴	4．巻 36
2．論文標題 日本列島における人類の初期移住ー議論と課題	5．発行年 2023年
3．雑誌名 文化交流研究	6．最初と最後の頁 37-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Rozzi Roberto、Lomolino Mark V.、van der Geer Alexandra A. E.、Silvestro Daniele、Lyons S. Kathleen、Bover Pere、Alcover Josep A.、Ben?tez-L?pez Ana、Tsai Cheng-Hsiu、Fujita Masaki、Kubo Mugino O.、Ochoa Janine、Scarborough Matthew E.、Turvey Samuel T.、Zizka Alexander、Chase Jonathan M.	4．巻 379
2．論文標題 Dwarfism and gigantism drive human-mediated extinctions on islands	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Science	6．最初と最後の頁 1054～1059
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1126/science.add8606	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計58件（うち招待講演　28件／うち国際学会　24件）

1．発表者名 Kaifu, Y.
2．発表標題 Human maritime adaptation and ancient voyage: East Asian case
3．学会等名 International Workshop: Maritime Adaptation and Material Culture in Southeast Asia (National Museum of Ethnology, Osaka（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2020年

１．発表者名 Kaifu, Y.
２．発表標題 Palaeolithic ocean crossings in East Asia: An experimental approach
３．学会等名 International Conference on Homo luzonensis and the Hominin Record of Southeast Asia (University of the Philippines College of Science Auditorium, Quezon City)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 海部陽介
２．発表標題 海を越えた最初の日本列島人～実験航海で探る３万年前の挑戦～
３．学会等名 日本がん検診・診断学会　第13回習熟講習会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 海部陽介
２．発表標題 黒潮の海を越えた３万年前の祖先たち －「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」から得たもの－
３．学会等名 台湾東方海洋文化探求国際学術研討会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kaifu, Y.
２．発表標題 Stories behind the people’s migration from Africa to the Japanese Islands 30000 years ago
３．学会等名 PaleoAsia 2018, The International Workshop, Cultural History of PaleoAsi（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 海部陽介
２．発表標題 ホモ・サピエンス最初のアジア拡散を再考する
３．学会等名 第72回日本人類学会大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kaifu, Y.
２．発表標題 Tactics needed for maritime migration 30,000 years ago to the Ryukyu Islands, southwestern Japan: A discussion based on an experimental voyage project
３．学会等名 The 21th Congress of the Indo-Pacific Prehistory Association（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kaifu, Y.
２．発表標題 Palaeolithic ocean crossings in the Japanese Archipelago: Were they accidental or intentional?
３．学会等名 The 21th Congress of the Indo-Pacific Prehistory Association（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Sato, H.
２．発表標題 Pleistocene to Holocene Archaeology in the Japanese Archipelago
３．学会等名 国立カザフスタン大学歴史学・民族学部(カザフスタン共和国アルマトイ市)（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Natsuki, D. & Sato, H.
２．発表標題 Different special activity in the Late Glacial microblade site: a case study based on the Yoshiizawa site of northern Japan
３．学会等名 The 23rd Suyanggae International Symposium in Malaysia “Suyanggae and Lenggong : Prehistory Adaptation”（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Sato, H.
２．発表標題 Three Paleolithic cultures in the Japanese Archipelago
３．学会等名 The 23rd Suyanggae International Symposium in Malaysia “Suyanggae and Lenggong : Prehistory Adaptation”（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Sato, H.
２．発表標題 Paleolithic culture in the Japanese Archipelago
３．学会等名 インド・バローダ大学(バローダ市)（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Sato, H.
２．発表標題 New discovery of Pleistocene cemetery at the Shiraho-Saonetabaru Cave Site in Japan
３．学会等名 The 9th Meeting of the Asian Paleolithic Association (Altai, Russia)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Vasilevsky, A.A., Grishenko, V.A., Sato, H., Fukuda, M.
２．発表標題 The stages of settlement of islands of the Far-Eastern seas
３．学会等名 International Conference “Historical and recent developments of Russian-Japanese relations. Celebrating 160 years of consular relations” (Vladivostok, Russia)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤宏之
２．発表標題 神子柴遺跡はなぜ残されたか?
３．学会等名 シンポジウム神子柴系石器群：その存在と影響（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤宏之
２．発表標題 旧石器時代における境界と地域性
３．学会等名 日本考古学協会2018年度静岡大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤宏之
２．発表標題 日本列島からみた朝鮮半島湖南地域の旧石器文化
３．学会等名 第18回韓国旧石器学会定期学術大会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤宏之
２．発表標題 北海道の旧石器文化
３．学会等名 札幌学院大学総合研究所シンポジウム『文化遺産と地域振興』（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 池谷信之・中川真人
２．発表標題 相模原市橋本遺跡出土石器群の黒曜石原産地推定と編年的再検討
３．学会等名 日本旧石器学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 池谷信之
２．発表標題 温帯更新世の狩猟採集民その３－落とし穴猟・黒曜石・行動圏－
３．学会等名 パレオアジア文化史学『温帯更新世の狩猟採集民の実像を求めて－寒帯・温帯・熱帯での狩猟採集民の資源利用と移動・移住パターンの比較－
４．発表年 2018年

１．発表者名 池谷信之
２．発表標題 海を渡る黒曜石－伊豆南東海岸における中継地の生成と航海－
３．学会等名 明治大学黒耀石研究センターシンポジウム 資源環境と人類2018ナイフ・石鏃・磨製石斧－石材資源とその流通
４．発表年 2018年

１．発表者名 芝康次郎
２．発表標題 西北九州黒曜石原産地研究の現状
３．学会等名 第８回石材のつどい
４．発表年 2018年

１．発表者名 芝康次郎
２．発表標題 腰岳黒曜石原産地の様相
３．学会等名 日本旧石器学会普及講演会「福岡とその周辺の旧石器文化」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Iwase, A., Sano, K., Otake, N., Yamada, M.
２．発表標題 Experimental use-wear analysis on the Early Upper Paleolithic edge-ground stone axes in the Japanese Archipelago
３．学会等名 The XVIII° UISPP World Congress in Paris（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 山崎真治
２．発表標題 沖縄先史土器の起源をめぐる近年の動向と作業仮説
３．学会等名 日本考古学協会第84回総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 山崎真治
２．発表標題 沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の発掘調査
３．学会等名 九州旧石器文化研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 山崎真治
２．発表標題 沖縄における旧石器時代研究の現状と課題
３．学会等名 東南アジア考古学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Fujita, M., Yamasaki, S.
２．発表標題 Food exploitation and sustained consumption by Pleistocene Ryukyu Islanders
３．学会等名 The 21th Congress of the Indo-Pacific Prehistory Association（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤田祐樹
２．発表標題 沖縄の旧石器時代遺跡と人骨
３．学会等名 第30回人類形態科学研究会学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤田祐樹，久貝嗣弥
２．発表標題 沖縄県宮古島市ツヅピスキアブの完新世初頭～更新世堆積層からの魚骨出土例
３．学会等名 第72回日本人類学会大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤田祐樹
２．発表標題 沖縄における旧石器人の資源利用
３．学会等名 跨越黒潮：台灣東方海洋文化探究國際學術研討會（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 25.久保麦野，藤田祐樹
２．発表標題 更新世の化石種リュウキュウジカの島嶼小型化と生活史進化
３．学会等名 第66回日本生態学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 久保麦野，山田英佑，藤田祐樹
２．発表標題 三次元マイクロウェア形状解析による更新世化石シカの食性推定
３．学会等名 日本古生物学会 第１６８回例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 久保麦野，藤田祐樹，大城逸朗
２．発表標題 3 次元マイクロウェア形状解析による更新世絶滅種リュウキュウジカの食性推定
３．学会等名 第72回日本人類学会大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 海部陽介
２．発表標題 海を越えた最初の日本列島人 ～実験航海で探る３万年前の挑戦～
３．学会等名 日本航海学会 航海功績賞受賞講演（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 海部陽介
２．発表標題 海を越えた最初の日本列島人 ～実験航海で探る３万年前の挑戦～
３．学会等名 日本麻酔科学会　第67回学術集会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 海部陽介
２．発表標題 海を越えた最初の日本列島人 ～実験航海で探る３万年前の挑戦～
３．学会等名 第3回海中海底工学フォーラム・ZERO（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 藤田祐樹，松浦秀治，佐野貴司，近藤恵，澤浦亮平，久保麦野，野田昌裕，久貝 弥嗣
２．発表標題 沖縄県宮古島市ツヅピスキアブにおけるイノシシとシカの時間的関係
３．学会等名 第74回日本人類学会大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 久保麦野，藤田祐樹
２．発表標題 更新世後期の洞穴遺跡から産出したリュウキュウジカの食性推定
３．学会等名 日本古生物学会第169回例会
４．発表年 2020年

１．発表者名 海部陽介
２．発表標題 アジアの人類史200万年
３．学会等名 東北大学東北アジア研究センター25周年記念公開講演（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kaifu, Y.
２．発表標題 Origins of maritime transport in East Asia
３．学会等名 IEEE OES Underwater Technology（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 海部陽介・郭天・久保田好美・詹森
２．発表標題 漂流か航海か？　漂流ブイデータによる後期旧石器時代の海洋進出についての検討
３．学会等名 日本第四紀学会2021年大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 海部陽介・郭天・久保田好美・詹森
２．発表標題 琉球列島における後期旧石器時代“漂流説”についての実験的検証
３．学会等名 2021年度日本旧石器学会第19回研究発表
４．発表年 2021年

１．発表者名 海部陽介・郭天・久保田好美・詹森
２．発表標題 後期旧石器時代の海洋移住をめぐる漂流説についての実験的検証
３．学会等名 第74回日本人類学会大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 藤田祐樹
２．発表標題 島嶼環境における旧石器人の文化と生活
３．学会等名 東北大学東北アジア研究センター25周年国際シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kaifu, Y.
２．発表標題 Another Palaeolithic frontier: Modeling the earliest seafaring in East Asia
３．学会等名 Insights into Human History in the Eurasian Stone Age: Recent Developments in Archaeology, Palaeoanthropology, and Genetics（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 海部陽介
２．発表標題 移動するヒト
３．学会等名 人類学関連学会 5 学会合同公開シンポジウム『○○なヒト－ヒトの呼称も人それぞれ』（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kaifu, Y.
２．発表標題 Advances in human evolutionary studies in the Indo-Pacific regions: new questions arising from recent discoveries
３．学会等名 22nd Congress of the Indo-Pacific Prehistory Association（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kaifu, Y., Lin, C.-H.
２．発表標題 The actual sea and simulated sea: What we learned from an experimental voyage project
３．学会等名 22nd Congress of the Indo-Pacific Prehistory Association（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kaifu, Y.
２．発表標題 Toward a synthetic model for Palaeolithic seafaring: A case in the Ryukyu Islands, southwestern Japan
３．学会等名 9th World Archaeology Congress（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Morisaki, K.
２．発表標題 The middle and late Upper Palaeolithic in the Japanese archipelago: Local development and continental influence
３．学会等名 Insights into Human History in the Eurasian Stone Age: Recent Developments in Archaeology, Palaeoanthropology, and Genetics（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Fujita, F., Kubo, M. O.
２．発表標題 Archaeological and Palaeontological Approaches to the Possible Human Impact on the Extinction of Pleistocene Endemic Deer in the Ryukyu Islands, Japan
３．学会等名 22nd Congress of the Indo-Pacific Prehistory Association（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Fujita, F., Yamasaki, S., Sawaura, R.
２．発表標題 Maritime adaptation of Paleolithic people in the Ryukyu Islands
３．学会等名 9th World Archaeology Congress（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 藤田祐樹
２．発表標題 洞窟出土の動物遺骸から見えた旧石器時代の環境とヒトの暮らし
３．学会等名 日本動物考古学会主催オンライン講演会
４．発表年 2022年

１．発表者名 池谷信之･近藤敏･忍澤成視
２．発表標題 南関東における縄文時代後期から晩期にかけての黒曜石流通
３．学会等名 日本考古学協会第88回総会研究発表セッション
４．発表年 2022年

１．発表者名 Iwase, A., Sano, K., Nagawaki, J., Yamada, M., Kaifu, Y.
２．発表標題 Late MIS3 edge-ground stone axes/adzes from the Japanese Archipelago
３．学会等名 Insights into Human History in the Eurasian Stone Age: Recent Developments in Archaeology, Palaeoanthropology, and Genetics（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 岩瀬彬・佐野勝宏・長崎潤一・山田昌久・海部陽介
２．発表標題 後期旧石器時代前半期刃部磨製石斧の新たな集成
３．学会等名 第20回日本旧石器学会2022年度研究発表会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Sano, K., Totsuka, S., Izuho, M., Morisaki, K.
２．発表標題 Spatio-temporal pattern of the early Upper Palaeolithic assemblages in the Japanese islands
３．学会等名 Insights into Human History in the Eurasian Stone Age: Recent Developments in Archaeology, Palaeoanthropology, and Genetics（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計12件

１．著者名 海部陽介	４．発行年 2019年
２．出版社 文藝春秋	５．総ページ数 225
３．書名 日本人はどこから来たのか？	

１．著者名 芝康次郎（分担執筆）、国武貞克（編）	４．発行年 2019年
２．出版社 奈良文化財研究所	５．総ページ数 122
３．書名 カザフスタン後期旧石器文化の研究	

１．著者名 山崎真治ほか（共著）	４．発行年 2018年
２．出版社 ボーダーインク	５．総ページ数 262
３．書名 南島考古入門－掘り出された沖縄の歴史・文化	

１．著者名 山崎真治ほか（共著）	４．発行年 2018年
２．出版社 沖縄県立博物館・美術館	５．総ページ数 103
３．書名 特別展　縄文と沖縄－火焔型土器のシンボリズムとヒスイの道－　図録	

１．著者名 山崎真治ほか（共著）	４．発行年 2018年
２．出版社 十三行博物館（台湾）	５．総ページ数 57
３．書名 Joy愛十三行第7期　沖縄人類史	

１．著者名 藤田祐樹（共著）	４．発行年 2019年
２．出版社 西日本出版社	５．総ページ数 261
３．書名 海と人との関係学 第１巻 私たちはいつまで魚が食べられるか	

１．著者名 山田昌久（共著）	４．発行年 2018年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 269
３．書名 ものと技術の古代史－木器編	

１．著者名 海部陽介、佐藤宏之	４．発行年 2022年
２．出版社 雄山閣	５．総ページ数 132
３．書名 海洋進出の初源史	

１．著者名 海部 陽介	４．発行年 2020年
２．出版社 講談社	５．総ページ数 338
３．書名 サピエンス日本上陸　3万年前の大航海	

１．著者名 池谷信之　佐藤宏之	４．発行年 2020年
２．出版社 敬文舎	５．総ページ数 408
３．書名 愛鷹山麓の旧石器文化	

１．著者名 藤田　祐樹	４．発行年 2019年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 148
３．書名 南の島のよくカニ食う旧石器人	

１．著者名 森先　一貴	４．発行年 2022年
２．出版社 同成社	５．総ページ数 298
３．書名 旧石器社会の人類生態学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

３万年前の航海 徹底再現プロジェクト https://www.kahaku.go.jp/research/activities/special/koukai/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	佐藤　宏之 (Sato Hiroyuki) (50292743)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	
研究分担者	藤田　祐樹 (Fujita Masaki) (50804126)	独立行政法人国立科学博物館・人類研究部・研究主幹 (82617)	
研究分担者	佐野　勝宏 (Sano Katsuhiro) (60587781)	東北大学・東北アジア研究センター・教授 (11301)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	長崎　潤一 (Nagasaki Junichi) (70198307)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	山田　昌久 (Yamada Masahisa) (70210482)	東京都立大学・人文科学研究科・客員教授 (22604)	
研究分担者	岩瀬　彬 (Iwase Akira) (70589829)	東京都立大学・人文科学研究科・助教 (22604)	
研究分担者	池谷　信之 (Ikeya Nobuyuki) (80596106)	明治大学・研究・知財戦略機構（駿河台）・特任教授 (32682)	
研究分担者	森先　一貴 (Mirisaki Kazuki) (90549700)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授 (12601)	
研究分担者	芝　康次郎 (Shiba Kotaro) (10550072)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員 (84604)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	山崎　真治 (Yamazaki Shinji)	沖縄県立博物館・美術館・主任学芸員	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	根岸　洋 (Negishi Yo)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授	
研究協力者	久保田　好美 (Kubota Yoshimi)	独立行政法人国立科学博物館・地学研究部・研究主幹	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
第９回国際考古学会議（チェコ）におけるセッション「Global Evidence of the Late Pleistocene Seafaring and Maritime Adaptation: When, Where, and How」	2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
その他の国・地域	国立台湾史前文化博物館	国立台湾大学	中央研究院	他3機関
韓国	韓国大邱国立博物館			